

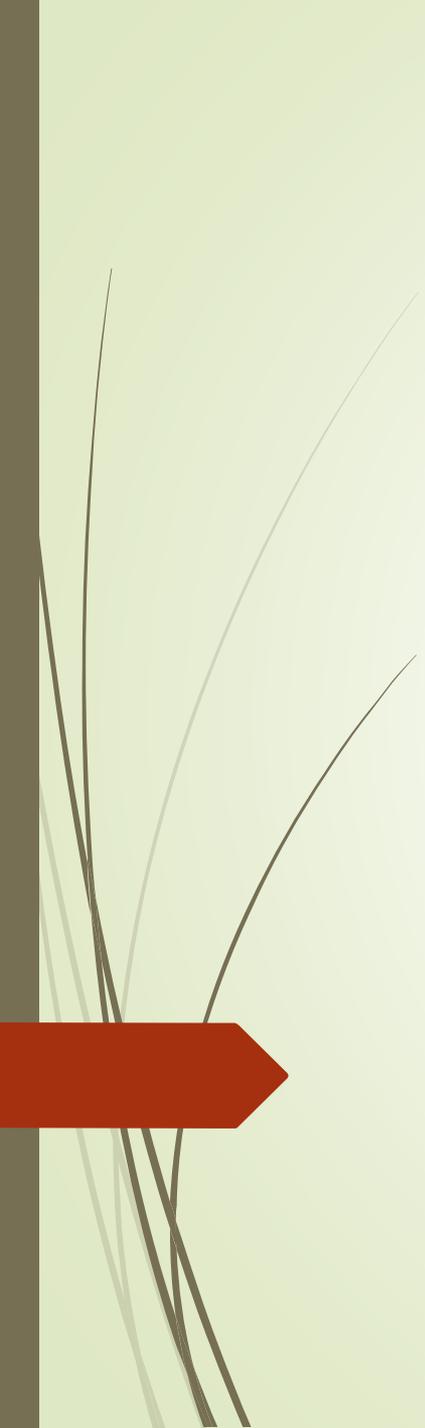


SITAシンポジウムの 来し方、行く末

SITAシンポジウム40回記念パネルディスカッション

福岡大学 大橋 正良

2017年11月29日(水) 8:30~9:30 白玉の湯泉慶 2階 末広、松風、石庭



自分にとってのSITA



これまでの自分のキャリアパス



<省略させていただきます>

SITAを通じた体験・SITAから得たもの

【体験】

- ➡ 【SITA運営】 駆け出しだったころ、KDD研究所でSITA理事会（だったと思う）の手伝いをした。堀内先生や大石先生らがどんどん仕切る姿を見て、会社とは違う！と感じた
- ➡ 【ISITA 創設】 同じくISITAを開始するかどうか、で大学/企業間で大きな意見の相違があった。企業はSITAで海外に出させるなどの意見が多かった。

【得たもの】

- ➡ 会社には決して得られない、研究に真摯に向き合う先生たちに出会え、議論できたのが大きかった。
- ➡ まだ10回前後に出会った研究者の方々が長い年月を経て貴重な、かけがえのない友人となった。

SITAの思い出 1

第27回SITA（下呂）2004

- ▶ 慶応中川先生からKDDI研主幹の依頼
- ▶ 実行委員長 平田康夫、大橋は総務を担当
- ▶ 小川明先生をはじめ、多くの先生方にお世話になり、無事盛況のうちに完了



SITAの思い出2 SITA学会の解散

- ▶ 平成20年～21年度ESS事業担当副会長を担当。当時のESS会長（小林先生）の要請を受け、SITA学会をESSに迎える検討実施。SITA側の会長は山本先生。
- ▶ 自由闊達な議論ができる独立した組織SITA



何か起これば責任がすべて会長個人に及ぶような形態の学会組織でいいのか？

- ▶ SITA2009 山口湯田温泉で、SITA学会の解散が決議。SITAはESSの組織（SITAサブソ）として新たな歩みを始めるに至った。
- ▶ その後のESSでの体制作りは藤原先生や楫先生をはじめ、数多くの先生方のご尽力で現在の体制に
- ▶ 組織面では安定化したが、一方では失うものも。



これからのSITAに望む
こと



SITAの良い文化を携え、新たな研究領域を築こう

- ▶ SITAは年齢の上の先生も若い研究者の方も同じに議論ができる場所（だから自分もまだフレッシュにやりたいと思う）
 - ▶ 情報通信の分野では、グローバルな標準化/規格化、チップ化の推進で、一種の手詰まり感が。
--ありきたりの改善を求めるより、何か破壊的なイノベーションに期待する声を聴くようになった。
 - ▶ 符号理論の歴史を見ると、幾度も“符号理論は死んだ”と言われてきた。しかし、その度に新たなパラダイムが提示され、多くの発展を見てきた。
 - ▶ SITA自身も、情報理論をルーツとしながら、通信、セキュリティ、学習理論などで新しい分野を生み出してきた。
-  SITAは必ず次のイノベーションの源泉を作れる！



そして人々に広くこの成果を 伝えてゆこう

- ▶ ESSという基礎・境界だけに閉じこもらず、広くその応用の領域まで取り込んでいってほしい。
- ▶ 産業界の方々、官の方々とも接点を持ってほしい
- ▶ 若手の研究者が自由闊達に研究・発表ができる場を引き続き維持してゆこう
- ▶ 国内だけにとどまらず、世界各地の研究者と交流を持っていただきたい。またそのような組織にSITAも一層成長されることを期待します
- ▶ 電子情報通信学会100周年の節にIT研専委員長を拝命したおかげで、先達の方々の偉業を実感することができました。次代の若手の方々も間違いなくそれを継承してゆかれるものと確信しています